

収穫後のナシ黒星病対策

秋季防除は重要です

佐賀県果樹試験場病害虫研究担当 近藤知弥

本年のナシ黒星病の発生は少なかったものの、本病はナシ栽培にとって重要な病害であり、近年多発傾向であることには変わりはありません。

収穫が終わった秋季から、次年産に向けた黒星病対策が始まります。一つ一つの対策を丁寧に行い、黒星病を抑制します。

病原菌の越冬場所

黒星病の翌年の第一次伝染源は、罹病した落葉および芽基部鱗片です。表1はそれを示す試験結果です。前年本病が多発した園から採集した落葉と枝を3月下旬に黒星病未発病のナシ樹周囲に設置した結果、設置した周囲ではその後黒星病が発生しており、特に落葉を置いた場所では発病葉率70%以上と激発しました(表1)。先述したように、罹病した落葉と鱗片がいかに重要な伝染源であるか分かります。

図1は秋～翌春にかけての伝染環を示します。本病原菌の鱗片への主な感染時期は10月中旬～11月中旬です。その病原菌は主に秋に感染・発病した罹病葉の秋型病斑から雨滴とともに流れ出して、鱗片に感染します。越冬後、園内に残存する罹病した落葉・鱗片が伝染源となり、翌春の新葉・幼果に被害を及ぼします。

次年産のためのこの時期の対策としては、落葉時期(概ね11月下旬頃)まで健全な葉・鱗片を維持すること、万が一発病した場合、園内から感染部位を無くすこと、等が非常に大切です。

表 1 黒星病の発生に対する第一次伝染源の影響（2002 年、佐賀果樹試）

第一次伝染源	発病葉率(%)	
	4月27日	5月17日
落葉 ^{注1}	9.0	72.0
芽基部鱗片 ^{注2}	0	7.7

注 1：3 月 27 日に 3 月上旬に採取した前年黒星病多発園の落葉を半径 1m に敷き詰めた

注 2：3 月 27 日に 3 月上旬に採取した前年黒星病多発園のナシ枝約 40 本を設置した

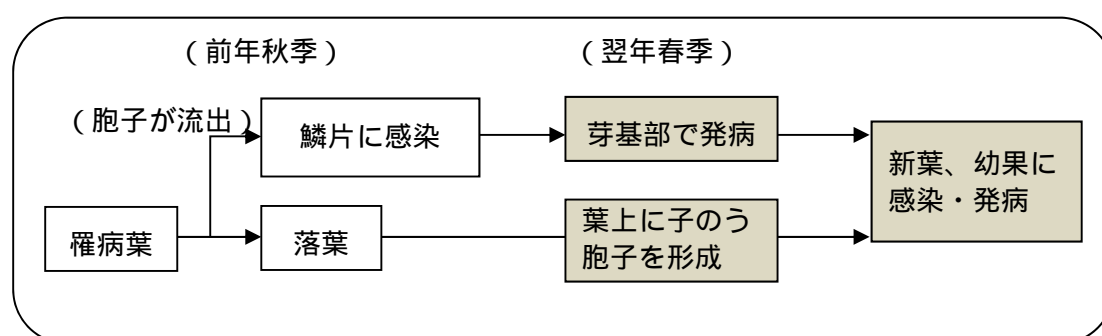


図 1 黒星病の秋から翌年春にかけての伝染環

薬剤防除

黒星病の薬剤防除は、いつまで続ければよいのでしょうか？ 先述のように、鱗片への主な感染は罹病葉上に形成された秋型病斑から流れ出る病原菌によるものであり、主要感染時期は 10 月中旬～11 月中旬です。そこで、葉・鱗片をしっかり守るために、10～11 月にかけて 2～3 回薬剤防除を行います。ただし、落葉が終了する時期には年次変動がありますので、園地をよく観察します。

使用する薬剤はデランフロアブル、キノンドーフロアブル等のような保護殺菌剤です。万が一、周囲に収穫が終了していない樹がある場合は、使用する薬剤の収穫前使用日数が短い薬剤を選択した上で、周辺へ飛散しないように十分に注意します（表 2）。ただし、アンビルフロアブル、スコア顆粒水和剤等のような DMI 剤は使用しません。なお、散布する際は、徒長枝にも薬液が十分に到達すること、薬液がかかりにくい園周辺部では手散布を行うことを心がけます。

表2 秋期の黒星病防除薬剤

	希釈倍数	収穫前日数
キノドーフロアブル	1,000倍	3日前まで
オーソサイド水和剤	1,000倍	3日前まで
チオノックフロアブル	500倍	30日前まで
デランフロアブル	1,000倍	60日前まで

耕種的防除

罹病枝葉の剪除

夏～秋季にかけて枝がおそ伸びると、この時期の葉は本病に感染しやすいことから鱗片への感染リスクも高まります。そこで、このような枝を中心に観察して罹病枝葉を見つけた場合は、速やかに剪除して園内に放置せずに処分します。また、冬季剪定時には秋伸び枝・ぼけ芽を必ず剪除・処分します。

落葉の処分

落葉は集めて園外に持ち出して処分するか、土中に埋設します。落葉の処分は地道な作業ですが、先述のように落葉は重要な伝染源です。園周囲の防風樹の株元等にも風で飛ばされた落葉が積もっていることもあるので「丁寧」に、また「1園ずつ確実に」行うことが大切です。



写真 落葉の状況

おわりに

秋季防除を徹底することで、病原菌の越冬密度を低減することができ、次年産での黒星病の発生の抑制につながります。そのためにも、収穫後の秋季防除を徹底しましょう